

岐阜県教育ビジョン検討委員会  
 高校の在り方専門委員会(第3回) 議事要旨

日 時	平成25年7月2日(火) 9:50~11:30
場 所	岐阜総合学園高等学校会議室
出席者	<p>&lt;委員&gt; 7名(50音順)          加藤直樹委員(委員長)、高賀敦子委員、嶋崎吉弘委員(副委員長)、          島田亜由美委員、中島潤委員、信田哲彦委員、前谷智香委員</p> <p>&lt;県教育委員会&gt;          教育長、教育次長、義務教育総括監、総合教育センター長など</p>

会議の概要	
1	開会
2	あいさつ
3	協議事項 社会経済の基盤を担う能力の育成について <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ふるさとを支える地域社会人の育成</li> <li>○ 多様な進路目標を実現するための能力の育成</li> </ul>
4	閉会

◆ 意見の要旨

【加藤委員長】

- 工業系の授業を見るのは初めてであったが、設備も充実していると感じた。そこで学ぶ生徒の姿を見ることもできた。まずは、校長先生から資料1のご説明をいただいた上で、委員の皆さんから感想などを聞きながら、本日の本題に迫っていきたい。

【亀井校長】

(総合学科を紹介する生徒作文のあと資料1の説明)

- 平成2、3年ごろに高校進学率が95%を超え、そのころに一番問題となったのは、入学後の生徒と学校、学科とのミスマッチが多くなり、不登校、中途退学が増えてきたこと。その対策として、平成5年に普通科に単位制を導入、単位制を生かしながら普通科の学習内容も専門学科の学習内容も学べる第3の学科として、平成6年に総合学科がつけられた。
- 岐阜県では平成9年に4校が設置され、今年で17年目になる。岐阜総合学園高校は、現在7クラス規模で9系列であり、いいバランスで展開できている。
- 総合学科とは「学び方を学ぶ学科」。生涯にわたって学習する姿勢を身につけさせたい。そのことがシステムの的に可能なのが総合学科。1年次に「産業社会と人間」で自分の適

性を見つめ、2年次から系列を選択し科目選択を行い、3年次では課題研究を実施。この流れで生涯にわたって学び続ける姿勢を養っていききたい。

**【信田委員】**

- 自分が卒業した普通高校のように、当たり前のように大学へ進学していくのは受動的な面もあるが、自分で総合学科を選び、授業を選び、職業を考えていくという「意思」が組み込まれる仕組みが素晴らしい。ものづくりコンテストなどのように客観的に活動が評価される仕組みも素晴らしいと思う。

**【前谷委員】**

- 自分の専攻の系列が決まっても他系列の授業も選択できる仕組みは素晴らしいと思う。
- 他学年や他系列での授業はその都度、自身が異なる環境に置かれることになる。普段と異なる環境で違う人たちと出会い、議論できることは、社会で求められる資質のひとつ。それを実践できていることも魅力的。

**【加藤委員長】**

- 多様な人たちが出会い、ディスカッションを通して一つの方向に向かうことは社会の中の重要な要素であり、それをどう学校教育の中で実現させていくかが大切。その体験のひとつが他学年や他系列の科目選択ができる仕組みだと解釈できるがどうか。

**【亀井校長】**

- HR単位で授業をした方がクラス経営はしやすいのだろうが、2・3年次になると系列での授業がほとんどになる。同学年、同一集団とは異なる環境での議論を実践できることが利点のひとつであることは意識していたが、その資質が社会の中で大切であることを改めて認識できた。

**【島田委員】**

- 実践的な授業によって、社会に直結する力を身に付けていることは企業にとってもありがたいことだと思う。
- 専門学科に比べ専攻を決めるのが1年遅れるが、自分が生きていく道を決めるための時間は将来にとって重要。以前は、親が生活の中で少しずつ伝え行っていた将来設計を、学校のカリキュラムの中で行える仕組みはありがたい。
- 卒業者のほとんどが、自分のやりたいことをしっかり見つけた上で進学し、上級学校でさらに深めて就職していく姿勢にも魅力を感じる。

**【加藤委員長】**

- 社会の基盤となる確固たる力を、実践を通して磨きながら自分の方向性や意思を確認し、チャレンジしていく場が学校の中につくられていることが総合学科の魅力。

**【嶋崎副委員長】**

- 「産業社会と人間」という教科で自分の進路をじっくり考えることは大切。
- 即戦力で社会に出た人よりも、問題意識をしっかりと持って社会に出た人の方がその後の伸びしろは大きい。
- これからの長い人生でいろいろ考えるという姿勢を高校で培えるところがよい。

**【加藤委員長】**

- 全体のビジョンの中で「共生」や「自己実現」がテーマになっている。自分の意思を持ちながら、自己を問いながら学んでいく姿勢が、自己実現に到達するひとつの姿では

ないか。

**【中島委員】**

- 総合学科は生徒の多様化から生まれた学科であるため、ねらいがはっきりしている。具体的な学びを育む学習システムが総合学科を支えている。
- （発表した生徒に対して）総合学科のメリット、デメリットを認識し、その中で自分がどうしていけばよいか認識していることが人間としての成長を感じさせられた。
- （亀井校長への質問）「産業社会と人間」や「課題研究」の中で地域社会と関わる部分はあるか。

**【亀井校長】**

- 直接、地域に還元することは少ないが、1年次の2月に実施するインターンシップなど、地域力を借りながら学習をしていく場面が多い。しかし地域社会との係わり方には今後工夫の余地があると思う。

**【高賀委員】**

- 総合学科は自分で授業の選択ができる（自分の時間割が作れる）ということでアピールしてきた。中学生にとって総合学科に対する印象は良いが、何でも好きな授業が取れるわけではない。また、「何でもできて何もできない」ことにならないよう課題意識をしっかりと持つことが必要。
- 産業構造の変化に対応した施設・設備の充実が難しいのではないかと。昨今、生徒も学びながら対応する力の必要性を感じ、進学する生徒が多くなっているのではないかと。

**【亀井校長】**

- 総合学科の特徴と部活動での指導力を生かして、生徒にしっかりとした未来航路を切り開かせたい。

※ 事務局から資料2・3・4の説明

**【信田委員】**

- 高校は出口である就職を考え、企業の欲しい人材や専門の分野などを把握して、教育体制をとっていかないと、企業のニーズとの間でミスマッチが起こってしまう。ニーズを調査したり戦略的に考えたりしているのか。

**【教育総務課教育主管】**

- 高校では、産業界の方々と意見交換会を行ったり、求人などのときに直接お話を伺っている。しかし、高校の入学者の定員を決めるのは中学校3年生を対象にしているが、3年経ってから高校卒業するので、急激的な変化に対応するのは難しい。

**【信田委員】**

- 民間の就職のエージェントがいろいろな情報を持っている。例えば、2016年問題というものがあり、新卒者が激減して採用が難しくなる。企業は毎年毎年の業績によって採用者数が変わるが、就職のエージェントは長い目で見て採用がどうなるのかをよんでいる。それらの企業と連携していくことが必要になっていくと考える。

**【学校支援課長】**

- 産業教育振興会において各教科ごとに部会があり、そこで企業から意見をいただ

いる。

**【高賀委員】**

- いまだにいい高校に行って、いい大学に行って、いいところに就職するという考えが社会全般にある。そうではなくて、「今の社会はこうなっているよ」と保護者が子どもたちに現実の社会について話をしてほしい。

**【信田委員】**

- そうは言っても、中学生の保護者もいろいろ知っているわけではない。学歴がなくても活躍している人は山ほどいる。有名な企業に入れば安心という考えの人はごく一部である。

**【前谷委員】**

- 事業主(社長)が、口をそろえていわれるのは、大卒の人は、自己主張は強いが、会社の主旨に従って行動することや必死に取り組む姿、また本気が伝わってこない。むしろ高卒の人は、一生懸命さや言われたことに応えようとする姿がみられる。社会に出てからの伸びしろがものすごくあると聞きます。
- 「仕事はお金を稼ぐための手段」という考え方の若者が多く、人生の中で働くことの位置づけがあいまい。目的意識を持ち、仕事にやりがいを見つけ、人生の中で達成感を味わってほしい。

※ 事務局から資料5の説明

**【加藤委員長】**

- 特色ある方向性をもつ高校について議論していきたい。

**【中島委員】**

- 飛び出せスーパー専門高校生推進事業は、地域と連携して生徒のモチベーションを高めて実施しているので良いと思う。むしろ普通科高校に課題があると思う。高校時代に一度は地域と交流させるとよい。
- 小中学校には「学区」があるが、同じ様に高校には「学域」という考えが必要である。大阪の布施北高校や島根県の隠岐島前高校は地域で支えて成功した例である。岐阜県にも地域で支えていかなければならない高校がある。
- 静岡県はものづくりが盛んな県なので「工業科+理数科」の科学技術高校をつくった。グローバルな人材を育てるために「英語科+理数科」の高校をつくってもよいのではないか。
- 総合教育センターがセンター附属高校を持ち、教員を養成して県下へ輩出していけば、岐阜県の教育を大きく変える即効性がある。
- 岐阜大学は研究したことを附属小中学校で実践することができる。高校に関しても、総合教育センターで研究したことを附属高校で実践するというのはおもしろい考えである。そのためには、総合教育センターの機能を研修重視から研究重視に変えていかないといけない。

**【島田委員】**

- 今までと全く違った発想が必要になる。出口をしっかりと見据えて、本当に必要な学

科や学校をつくっていかねばいけない。最近の仕事の中で必要になってくるものだが、一つの専門だけではなく、いくつかのものが合わさって新しく別の専門になってきている。高校においても、一つの専門だけではなく、グローバルな広い知識を持つために、いくつかの学科を合わせて新しい学科をつくってもよいのではないか。

**【高賀委員】**

- 岐阜県は他県に比べるとまだ高校生の就職先はあるほうである。岐阜県がどんな状況に置かれているのかをしっかりと洗い出して、教育全般でイノベーションしていかねばならない。

**【中島委員】**

- 専門高校において、学科ではなく領域で考え、いくつかの科を融合させていくことも考えられるのではないか。特に、生徒減少期にはこのようなことを考えなければいけない。

**【信田委員】**

- 今まであまり意識してこなかったが、「この地域に残りたい」という気持ちが大事。そのためには、地域の企業が元気であることが必要。そこでどんな人材がほしくて、その人材を高校をはじめ地域がどのように育てていくかを考えていくことが大事。

**【前谷委員】**

- ふるさとに対する愛着心の全国ランキングで岐阜県は 37 位。戻ってきたいという想いになっていないのでは？そこで、岐阜ならではの魅力をもっとアピールし、愛着心が湧くような取り組みがもっとあってもよいように思う。インターンシップなどで地元の働く人と出会い、ふるさとに対する熱い想いを育て、岐阜を支えていきたいという気持ちが子どもたちの中にふつつと芽生えてくるようなおもしろい取り組みがあるとよいのでは？

**【加藤委員長】**

- 地域が高校をバックアップして、地域から発信していく方法もある。大阪のデュアルシステムは、地域社会との係わりを意識した良い取組である。インターンシップで2、3日お世話されて終わってしまうのではなく、企業に本当に入り込んで相乗効果を出せるというぐらいの関係になれることが重要。

**【前谷委員】**

- 大阪のデュアルシステムは、よいシステムだと思うが、連続して長期にわたる就業体験の方が望ましいと思う。与えられた仕事をこなすだけでなく、見て学ぶ瞬間があったり、周りの人が忙しく働いている中で自分に何ができるのかを考え、工夫しながら、課題を乗り越えていくという生の職場体験ができる。

**【加藤委員長】**

- 地域というものは、子どもにとって学べる場であり、繋がる場であり、自己を再認識できる場である。そういう場を学校教育の中に取り入れてみていただきたい。
- 学校のカリキュラムの中で、どのように自分を磨いていくのかを、もっと子どもたちに託してもいいのではないか。
- 改革の手段はいろいろあるので、しっかり検討して、高校から発信されるメッセージになれるとよい。